解答解説

2024後期・社福国試対策

ソーシャルワークの理論と方法・専門(115～123＋⑪)

115 インフォーマルなサポートに関する次の記述のうち，最も適切なものを1つ選びなさい。

1．インフォーマルなサポートは，継続的，安定的，普遍的な性質をもつ。

2．インフォーマルなサポートは愛他主義に基づいており，その反対の排他主義に変化することはない。

3．インフォーマルなサポートは，生活の気づきから個別的で多様な支え方を生み出すことができる。

4．インフォーマルなサポートは，資源不足に対する代替案として活用できるように専門職が指導する。

5．インフォーマルなサポートは，専門職業的な支援観でクライエントとかかわる。

【正答】3

1．適切でない。選択肢は制度に基づくサービスの特徴である。インフォーマルなサポートは，その人との関係性によって成立するため，安定して継続するとは限らないし，どの地域においても同様のサポートがあるとも限らない。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P90参照）

2．適切でない。インフォーマルなサポートは，家族愛や地域愛，また自分の住む街を暮らしやすい街にしたいという地域愛や他者愛に基づいて成立する。一方でこの愛他主義は，その正反対の排他主義に変化し得る感情でもある。暮らしやすい地域にしたいという思いと同時に，わからないもの，今までにないものを受け入れたくないという感情が生じることもある。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P90参照）

3．適切。インフォーマルなサポートは，住民としての細かな気づきから極めて個別的で多様な考え方を生み出す。それが先駆的，開拓的と呼ばれ，次の新しい制度政策を引き出すことにもなる。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P90参照）

4．適切でない。専門職と住民とは対等なパートナーである。専門職がインフォーマルなサポートの特質を理解せず，専門サービス資源の不足に対する安易な代替とみなしたり，それを指導したりするならば，その連携は難しい。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P91参照）

5．適切でない。インフォーマルなサポートは，家族愛や地域愛，また自分の住む街を暮らしやすい街にしたいという地域愛や他者愛に基づいて成立する。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P90参照）

116 相談援助過程における目標設定に関する次の記述のうち，最も適切なものを1つ選びなさい。

1．クライエントの個人の価値観や文化に沿った目標を設定する。

2．曖昧な目標を設定することにより，達成の可能性を高める。

3．クライエントが現実に直面することを回避するために，抽象的な目標を設定する。

4．援助計画を立案した後に目標を設定する。

5．正確な評価を行うために，援助の終結まで目標の修正は行わない。

【正答】1

1．適切。ソーシャルワーカーが好ましいと考える目標ではなく，クライエント自身の個人の価値観や文化に沿ったものであり，クライエントの動機や能力などの内的資源を動員することにより達成可能なものでなければならない。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P175参照）

2．適切でない。目標は明確に特定される必要がある。見方によれば達成できたともとらえられるし，達成できなかったともとらえられるような曖昧な目標設定は避けなければならない。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P174参照）

3．適切でない。目標は具体的な表現を用いて設定する。具体的な目標を設定することは，クライエントにとって苦しい現実に直面し，現状を切り開くために自分でできることは自分で引き受けることを求められることでもある。クライエントの自己決定権を保障し，クライエントが自分の問題を自分で取り組めるようにしていくために，ワーカーはクライエントのペースに合わせながら協働して目標設定に取り組むことが重要である。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P174参照）

4．適切でない。目標設定をした後，その目標に向けた援助計画を立案する。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P127参照）

5．適切でない。モニタリングの際に当初予測していた目標達成が進んでいないことがわかれば，目標達成の方法を再検討や，設定した目標の修正が必要になる。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P177参照）

117 グループワークに関する次の記述のうち，適切なものを1つ選びなさい。

1．グループワークの源流は，慈善組織協会の友愛訪問活動に求めることができる。

2．ジェネラリスト・ソーシャルワークの体系化が進んだことにより，グループワークの活用は不要となった。

3．グループワークでは，個人の問題解決よりもグループ全体の課題解決を優先する。

4．グループメンバー間の相互作用とプログラム活動は，グループワーク特有の援助媒体である。

5．グループワークは，ケースワークで問題解決が図られないケースに対して効果を発揮する。

【正答】4

1．適切でない。慈善組織協会の友愛訪問活動は，ケースワークの発展につながった。グループワークの源流はセツルメント運動に求めることができる。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P60参照）

2．適切でない。ジェネラリスト・ソーシャルワークでは，個別援助だけでなく，グループ，組織，地域などへの幅広い援助展開が求められる。グループワークはジェネラリスト・ソーシャルワークにおいても重要な方法の一つであることに変わりはない。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P60参照）

3．適切でない。グループワークは，グループを活用してメンバー個々人やグループ全体が直面している問題を解決していく。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P60参照）

4．適切。メンバー同士がお互いに刺激し影響しあう相互作用関係を活用して，メンバー同士の相互援助と共通目標達成に向けての協働が行われる。また，グループで展開していく具体的な活動や行事であるプログラム活動を通して，仲間関係を成長させ，グループ内の相互作用が深まる。この二点は，グループワークならではの援助媒体である。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P64参照）

5．適切でない。ワーカーは，クライエントのニーズをアセスメントしてグループを活用した援助が有効だと判断した場合に，グループワークへの参加を促す。ケースワークが無効であるからという理由ではない。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P62参照）

118 D君（14歳）は，母親が病気のために入退院を繰り返しているため，出生後に乳児院に入所し，その後，児童養護施設で生活している。進路決定の時期になったので，児童養護施設のE職員はD君と面接を行った。D君は，「高校には行かない」「施設を出てアパートを借りる」と話した。中学卒業後にはどのようなことをしたいのかを尋ねたところ，「自分で働くしかないだろう。誰も頼りにできないんだよ」と感情的に言った。

次の記述のうち，この面接でのバイステックの原則に基づいたE職員の関わりとして最も適切なものを1つ選びなさい。

1．個別化の原則に基づき，D君と同じくらいの学力の先輩が通学している高校への入学を勧める。

2．統制された情緒的関与の原則に基づき，D君の感情が収まるようになだめる。

3．意図的な感情表出の原則に基づき，E職員の率直な気持ちをD君に伝える。

4．非審判的態度の原則に基づき，D君の話を聴きながら，具体的な希望について尋ねる。

5．自己決定の原則に基づき，D君の決定を認めてその場で退所の手続きを進める。

【正答】4

1．適切でない。個別化の原則とはクライエントを個人として捉えることである。他のクライエントと類似性があってもクライエント一人ひとりを他とは異なる存在として尊重する援助姿勢である。D君は「高校には行きたくない」と話しているが，その背景を理解しながらD君自身の支援を行う必要がある。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P185参照）

2．適切でない。統制された情緒的関与とは，援助者が自分の感情を自覚して吟味することである。クライエントの感情を調整することではない。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P185参照）

3．適切でない。意図的な感情表出とは，クライエントの感情表現を大切にすることである。ワーカーの感情を率直に伝えることではない。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P185参照）

4．適切。非審判的態度とは，クライエントを一方的に非難しないことである。D君は感情的に話をしているが，D君の気持ちを受け止め，より理解しようと話を聴こうとしている。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ第3版』中央法規出版（2015年）P185参照）

5．適切でない。自己決定を尊重することは重要である。しかしD君の言葉をそのまま実行することが自己決定の尊重ではない。D君の発言の背景を理解したり，他の選択肢を検討しながら，自己決定を支援していく必要がある。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P185参照）

119 事例を読んで，医療ソーシャルワーカー（社会福祉士）が行ったアセスメント内容として，適切なものを2つ選びなさい。

〔事 例〕

Fさん（81歳，女性）は自宅で転倒して骨折と診断され，入院して治療を受けていたが，入院後に昼夜逆転や独語，物忘れなどの認知症状が出現してきた。主治医から治療が終了したので退院を促されている。Fさんは娘のGさん（58歳）と二人暮らしである。Fさんの夫は2年前に他界したが，その際は自宅でGさんが介護を行って看取った。Fさんには他県に住む息子がいるが，入院してから1回面会に来た程度である。Gさんは，Fさんの認知症状が出現したのは病院の対応のせいだと病院のスタッフに訴えており，Fさんへのケアのやり方についても看護師と意見が対立することがあった。また，日夜GさんはFさんに付き添っているが，Fさんのこれまでと違う言動に対して時折声を荒げる場面も見られる。医療ソーシャルワーカーは医師から退院支援の依頼を受け，Gさんと面接を行った。Gさんは「いずれ母を住み慣れた自宅へ連れて帰りたい。父を看取った経験から母の介護もしたいが，時々母にどう接したらよいのかわからない」と話した。

1．Gさんが介護の知識や経験に自信をもっていることは，退院後の介護の強みとなる。

2．Gさんは母であるFさんを思う気持ちと，Fさんの認知症状に対する驚きや不安を抱えている。

3．Gさんはキーパーソンとして適切でないので，Fさんの息子と面接を行うこととする。

4．Gさんの年齢では，親の介護ではなく自分の仕事を優先したほうが良い。

5．GさんはFさんを虐待する可能性があるため，Fさんは施設入所する必要がある。

【正答】1:2

1．適切。アセスメントではクライエントやその関係者のストレングスに注目し，その力をどのように活用していくかという視点をもつことが重要である。Gさんはこれまで介護の経験がありそのことに自信を持っていると思われるため，Fさんの介護においてもその力を活かすことができる。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P125参照）

2．適切。Gさんは，昼夜Fさんに付き添い，住み慣れた自宅へ連れて帰りたいという思いをもっている一方，これまでと違うFさんの言動に驚いたりそれに対して感情を表出したりしている。このようなクライエントや家族の気持ちも重要な情報である。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P120参照）

3．適切でない。息子は県外に住んでおり，これまで1回しか来院していない。息子がキーパーソンとして適切とは思えない。Gさんは職員に意見をはっきりと言う様子がうかがえるが，だからと言ってキーパーソンとして不適切というわけではなく，Gさんの思いや希望を聴きながら，FさんとGさんをどのように支援をしていったらよいのか検討していく必要がある。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P120参照）

4．適切でない。Gさんは自分が母親のFさんの介護をしたいと話している。ワーカーがGさんの優先事項を決める必要はない。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P78参照）

5．適切でない。Fさんの言動に対してGさんが声を荒げる場面も見られるが，それによって施設入所を決定することではない。Gさんは，Fさんの認知症状や介護に対する不安をもっているため，支援をしながらFさんとGさんとの生活を支えていく必要があると思われる。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P78参照）

120 事例を読んで，J相談員（社会福祉士）の対応として最も適切なものを1つ選びなさい。
〔事 例〕
家庭児童相談室に電話があり，J相談員が対応した。電話をかけてきたのは女性である。女性は「夫と子どものことで困っているのですが，ここでは相談にのってもらえるのですか」「相談していることが夫にわかったら困ります。親や友達にも知られたくありません。必ず秘密が守れますか」と話し出した。

1．「とりあえず最初に名前と住所を教えてください。ここの相談室の決まりです。」
2．「絶対に秘密を守って問題を解決します。私に任せてください。」
3．「ここで話されたことは最大限守られます。必要があってあなたのことについて他と相談する場合は，あなたに了解を得てからにします。」
4．「ご主人から暴力を受けているんですね。それではご主人に知られないようにしましょう。」
5．「まずは相談室に来られる日を教えてください。お会いして話を聞きましょう。」

【正答】3

1．適切でない。相談者は不安を抱えながら電話をしてきている。まずは話しやすいようにしていくことが大事である。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P108参照）
2．適切でない。秘密保持は重要な原則である。しかし状況によって，相談者に同意を得て相談内容を他と共有することもあり得る。また，相談員が問題を解決すると断言するものではない。相談者自身が問題解決できるように支援していくことが重要となる。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P169参照）
3．適切。相談者は，相談内容は他に漏れることについて非情に不安をもっている。秘密保持の原則について伝えることでその不安をできるだけ除去するように努めている。また支援のために他と情報共有が必要であれば，相談者と同意を得てからにすることも伝えている。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P108参照）
4．適切でない。相談者は，夫に知られたら困ると言っているが，夫から暴力を受けているとは話していない。
5．適切でない。必要に応じて直接会って話を聴くことにもなると思われるが，ここの相談室に来室してもらう必要性があるかどうかを判断するために，相談者の主訴を確認してスクリーニングを行う必要がある。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P110参照）

/21/ アウトリーチに関する次の記述のうち，最も適切なものを1つ選びなさい。

1．クライエントが感じている問題ではなく，ワーカーが認識している問題に焦点をあて，そこにクライエントに共感してもらう。

2．クライエントを理解するための情報収集を行うためには，クライエントの自宅よりも相談機関の面談室で面接を行う。

3．支援が開始されたら，アウトリーチを終了する。

4．地域住民とのつながりを構築することも含む。

5．所属機関の理解よりもワーカー個人の技術が求められる。

【正答】4

1．適切でない。アウトリーチが必要なクライエントは，特にインボランタリーなクライエントに必要である。インボランタリーなクライエントとは，まずは信頼関係を構築することが不可欠となる。そのため，ワーカーはクライエントのところに何度も足を運び，クライエントを気にかけたり，ワーカーや周囲の人の問題意識ではなくクライエントが感じている問題に焦点をあて，そこに共感していくスタンスをとることが不可欠である。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P162参照）

2．適切でない。アウトリートを行い，自宅訪問をして面接を行うことにより，家の中の様子から今の生活の維持がどのようになっているかを理解することにつながる。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P163参照）

3．適切でない。支援が始まった後も，アウトリーチは有効である。クライエント宅を訪問することで，クライエントの生活実態やサービスを利用した後の生活の様子を理解することにつながる。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P163参照）

4．適切。インボランタリーなクライエントをワーカーだけの努力で発見することは困難である。クライエントの相談が民生委員を始め地域住民から持ち込まれるためには，彼らと顔の見える関係をつくっていくことが必要となる。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P160参照）

5．適切でない。アウトリーチには，ワーカーが地域に出向いている間に情報共有できる仕組みや，ワーカーがアウトリーチを行うことの意義を理解している管理者・機関の姿勢が不可欠である。アウトリーチは一人のワーカーだけが用いる技術ではなく，相談機関全体の理解とバックアップのもとで展開する活動である。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P165参照）

/22 ケースカンファレンスに関する次の記述のうち，最も適切なものを1つ選びなさい。

1．職員の教育・研修の機会となる。

2．専門性の向上のため，単一の専門職が集まっておこなう。

3．カンファレンスでの発言を活発化させるために，事例提供者とコーディネーターとの事前の打ち合わせはおこなわない。

4．クライエントや家族は必ず同席する。

5．その日のうちに課題を解決するために，時間をかけて議論を行う。

【正答】1

1．適切。参加する職員がさまざまな助言や意見を得たり，自分自身の支援を振り返ることによって，新しい視点や見方を発見することができる。また，新しい問題に取り組む際の解決に向けての糸口，課題を見つけ出す力量を高めることにもつながる。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P218参照）

2．適切でない。必要に応じて多分野の専門職種，関係する機関や施設の職員も交えて行う。そのことにより，多面的な視点で課題を検討することができる。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P216参照）

3．適切でない。事例提供者は，コーディネーターや助言者と事前打ち合わせを行い，事例を取り上げた理由やその思い，検討したい焦点，時間配分などを確認することで，効果的なケースカンファレンスを行うことができる。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P219参照）

4．適切でない。クライエントや家族が参加するケースカンファレンスも増えてきている。当事者の意向や希望を尊重するためにも，また主体性を引き出す点においても，クライエントや家族の参加は有意義である。しかし必ず同席しなければならないというわけではない。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P220参照）

5．適切でない。解決できない課題が残ったり，議論が不十分なうちに終了予定の時間となることもある。参加者は業務の合間に時間を調整して参加している。また，時間を長引かせることがよりよい議論となるとは限らない。予定時刻となったらひとまず終了とし，残された課題は引き続き検討していくことで合意を得る必要がある。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P225参照）

123 事例を読んで，社会福祉協議会のY福祉活動専門員（社会福祉士）の対応として，最も適切なものを2つ選びなさい。

〔事 例〕

W市社会福祉協議会では，一人暮らしの高齢者から，ゴミ出しが困難で家にゴミが溜まってしまったり，ゴミ出しの分別や曜日がわからなくなってしまってゴミを出すことが不安となるという相談を何件か受けていた。そこでW市社会福祉協議会では，Y福祉活動専門員が中心となり，ゴミ出し支援のボランティアの養成を開始した。

1．ゴミ出し支援が必要な高齢者の近所の人の中から，ボランティアに適切な人を選出する。

2．ボランティアを希望する人が受講するための，福祉や介護に関する研修を企画する。

3．住民や民生・児童委員，福祉サービス事業所への周知活動を行う。

4．個人情報保護のため，ボランティアには担当する高齢者の氏名がわからないようにする。

5．ボランティアがゴミ出し支援の最中に高齢者の異変に気付いた場合，ボランティア同士で解決するように指示する。

【正答】2:3

1．適切でない。ボランティアは自発性に基づくものであり，社会福祉士が選出するものではない。

2．適切。ボランティアの希望者を対象に，高齢者に関する基本的な理解や地域の状況を学ぶことができる研修をおこなうことで，効果的なボランティア活動を行うことができるし，ボランティアの希望者も安心して活動できる。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P98参照）

3．適切。ゴミ出し支援のボランティアを募集したり，支援が必要な高齢者に知ってもらうためには，さまざまな方法での周知活動が必要となる。（『新・社会福祉士養成講座⑨地域福祉の理論と方法 第3版』中央法規出版（2015年）P12参照）

4．適切でない。ボランティアとの連携において個人情報の扱いには十分な配慮が必要だが，ボランティアはゴミ出し支援中に高齢者と話をしたり，安否確認をしたりすることも想定される。研修等で留意事項を説明して個人情報の取り扱いには注意しながら，高齢者とボランティアとの交流も深めていきたい。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P91参照）

5．適切でない。専門的な対応が必要な際には専門職が介入する必要がある。また専門職がボランティアに指示するのではなく協働して活動し，時として専門職はボランティアの支援を行う。普段からボランティアと専門職との連携が重要である。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P91参照）

①

事例を読んで，Kスクールソーシャルワーカー（社会福祉士）の対応に関する次の記述のうち，最も適切なものを1つ選びなさい。

〔事 例〕

M中学校では，不登校の子どもをもつ親をメンバーとした集まりを開催しており，Kスクールソーシャルワーカーが関わっている。集まりが開始してから2か月経過したある日の集まりで，参加者のLさんが「この会で他のお母さんと情報交換できたことは有意義だが，相変わらず親子関係は変わらず，何の問題解決もできていない」と話した。

1．雰囲気を保つために，Lさんに別室に移動してもらい個別対応をする。

2．集まりで得た情報を自宅で実践した上での発言かをLさんに確認する。

3．Lさんの要望はこの集まりの目的とは異なるので，他の会を紹介する。

4．現状でのLさん親子に適切な問題解決策を提案する。

5．Lさんの意見を受け止め，他の参加者はどのような思いをもっているかを話し合うこととする。

【正答】5

1．適切でない。Lさんを別室に移動させることで，Lさんや他のメンバーは，自由に意見を言うことができないと判断することになる。メンバー同士が安心して自由に交流が図れるような雰囲気をつくることが必要である。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規参照（2015年）P67参照）

2．適切でない。Lさんの発言を否定的に捉えた対応である。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P67参照）

3．適切でない。まずはLさんの意見やその背景にある思いを詳しく聞く必要がある。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P65参照）

4．適切でない。同じ課題を抱えるメンバーが集まったグループワークにおいて，問題解決の主体はメンバーであり，ワーカーは側面的に支援する。ワーカーが一方的に問題解決策を提案するのは適切でない。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P68参照）

5．適切。Lさんの意見を受け止め，この意見をきっかけに他のメンバーの意見や思いを引き出しながらメンバー間のコミュニケーションを促進することにより，メンバー同士で問題の解決に向かう気づきを促していく。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P69参照）

(2) 事例を読んで，R実習指導者（社会福祉士）の対応に関する次の記述のうち，適切なものを2つ選びなさい。

〔事例〕

Sさんは，障害者支援施設での実習を開始して1週間目である。Sさんは緊張しながらもできるだけ利用者とコミュニケーションを取ろうと努めているが，利用者は応じてくれなかったり，利用者の反応をSさんが理解できなかったり，時には利用者を怒らせてしまうことがあり，どのようにコミュニケーションを取ったらよいのか悩んでいた。そこで施設のR実習指導者に相談した。

1．できるだけ多くSさんから話しかけるように助言する。

2．技術には理論も必要となるため，学校で使用している教科書を再読するよう促す。

3．他の実習生と一緒に実習に関する意見交換をする機会をもうける。

4．利用者とコミュニケーションを取れないのは障害の特性上仕方がないことだと説明し，安心してもらう。

5．Sさんの努力を認め，どのような場面があったのか具体的に聞く。

【正答】3:5

1．適切でない。コミュニケーションでは，一方的に話しかけるだけではなく，相手を観察して非言語コミュニケーションを読み取ることも必要となる。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P261参照）

2．適切でない。相談しているSさんに対し，詳しく話を聞かずに教科書で学ぶように促すだけではSさんへの指導にはならない。実習指導もスーパービジョンであるが，スーパービジョンでは，スーパーバイジーの悩みを傾聴し，サポートする支持的機能も重要である。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P205参照）

3．適切。他の実習生と意見交換をすることにより，共感しあったり，支えあったり，まだ気づきを得ることができる。実習指導者も参加するグループスーパービジョン，もしくは実習生だけで行うピアスーパービジョンは有意義である。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P208参照）

4．適切でない。障害の特性でコミュニケーションが取れないと決めつけるのは間違いである。利用者の非言語のメッセージを理解するように努めたり，これまでの様子を学びながら利用者を理解しようとしていくことが必要である。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P261参照）

5．適切。Sさんの努力や悩みを受け止め，どのような課題に直面しているのかを傾聴して対応する必要がある。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ第3版』中央法規出版（2015年）P205参照）

③ 事例を読んで，福祉事務所のT現業員（社会福祉士）のエンパワメントアプローチの視点に基づいた対応として，最も適切なものを1つ選びなさい。

〔事 例〕

Uさん（56歳，男性）は若い頃から植木職人として働いていた。しかし脳腫瘍により視力が低下し視覚障害の認定を受け，仕事を続けられなくなった。30代で離婚をしていて元妻と子供とは疎遠である。再就職のための活動は思うようにいかず，貯金は底をついてきたため，生活保護を受給することとなった。ある日，T現業員がUさん宅を訪問すると，Uさんは「何かできる仕事を見つけて働きたい。そして，生活保護を受けなくても生活できるようになりたい」と話した。

1．生活保護を受給しなくてもよくなるように，元妻や子供の支援を受けるように促す。

2．Uさんができる仕事を見つけられるように，T現業員も一緒に方法を考えていくことを伝える。

3．就職活動がうまくいかなかった原因に焦点をあてて，Uさんを指導する。

4．生活保護を受給する権利があるので，仕事を探す必要はないことを伝えて安心してもらう。

5．年齢や障害から，今から新しい仕事を覚えるのは不可能であることを丁寧に説明する。

【正答】2

1．適切でない。Uさんは，自分で仕事を見つけて働きたいという意思がある。その思いを無視して疎遠である元妻や子供に頼ることを促すことは，エンパワメントではない。

2．適切。エンパワメントアプローチでは，ワーカーとクライエントのパートナーシップの確立が重要である。Uさんの思いに対し，T現業員も協働して取り組むことを示している。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P175参照）

3．適切でない。エンパワメントアプローチでは，クライエントもつ弱さを認めながらも，それ以上にクライエントの強さや可能性に着目し，その強化と開発によって問題の解決を図ることに力点を置く。就職活動がうまくいかなかった原因に焦点をあてて指導するという姿勢は，エンパワメントアプローチに基づく支援ではない。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P175参照）

4．適切でない。Uさんは仕事を見つけて働きたいという意欲を示している。その意欲はUさんの強みであり，エンパワメントではストレングスの特定も重要な要素である。選択肢はUさんの強みを認めていない。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P176参照）

5．適切でない。前選択肢と同様，Uさんの働きたいという意欲を受け入れず，ともに課題に対応しようともしていない。

④ スーパービジョンに関する次の記述のうち，最も適切なものを1つ選びなさい。

1．ある特定の領域についての知識技術が必要な時，その領域の専門家から助言指導を受けるためには，ピアスーパービジョンを依頼する。

2．スーパーバイザーが不在の時には，仲間や同僚だけで行うグループ・スーパービジョンを実施する。

3．個人スーパービジョンでは，個々のスーパーバイジーの課題や力量，状況に応じて丁寧に対応することができる。

4．スーパーバイジーは職場の上司で，スーパーバイザーはその部下であることが多い。

5．パラレルプロセスを予防するためには，スーパーバイザーとスーパーバイジーがよい関係性をもつことが重要である。

【正答】3

1．適切でない。ある特定の領域についての知識技術が必要な時，その領域の専門家から助言指導を受けるためには，コンサルテーションを活用する。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P211参照）

2．適切でない。仲間や同僚だけで行うスーパービジョンは，ピア・スーパービジョンである。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P208参照）

3．適切。個人スーパービジョンは，スーパーバイザーとスーパーバイジーが一対一で行うスーパービジョンである。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P207参照）

4．適切でない。スーパーバイザーはスーパービジョンにおいて，管理的・教育的・支持的機能について責任をもって果たす側であり，職場の上司にあたる。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P206参照）

5．適切でない。ソーシャルワーカーとクライエントの関係と，スーパーバイザーとスーパーバイジーの関係との間によく似た状況が起こりやす事が明らかになっており，これをパラレルプロセスという。スーパーバイジーがよい良い支援を行っていくためには，スーパーバイザーとスーパーバイジーがよい関係をもつことが重要となる。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P207参照）

5 インフォーマルな社会資源に関する次の記述のうち，適切なものを2つ選びなさい。

1．フォーマルな社会資源に比べて安定性に欠ける。

2．自治体や社会福祉法人によって提供される。

3．フォーマルな社会資源に比べて，融通性が低い。

4．フォーマルな社会資源に比べて，専門性が高い。

5．近隣住民や友人によって提供される。

【正答】1;5

1．適切。フォーマルな社会資源の方が，何らかの事情があってもサービスや担当者を変更するなどの調整をして支援が継続するなど，継続性や安定性が高いと言える。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P108参照）

2．適切でない。インフォーマルな社会資源は，家族や親族，近隣住民，友人などの私的な人間関係によって提供される。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P108参照）

3．適切でない。フォーマルな社会資源は利用要件，利用料等の要件や時間，内容の制約があるが，インフォーマルな社会資源はそのような要件が定められているわけではないので融通性が高いと言える。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P108参照）

4．適切でない。フォーマルな社会資源の方が，サービス提供を職業として行っているため，サービスの専門性は高いと言える。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P108参照）

5．適切。私的な人間関係によって提供される。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P108参照）

⑥ 事例を読んで，K市家庭児童相談室のH職員（社会福祉士）が用いた面接技法として，最も適切なものを1つ選びなさい。

〔事 例〕

Eさん（32歳，女性）は，6歳（男児）と1歳（男児）の子どもの子育て中である。ある日，K市家庭児童相談室へ相談に訪れ，H職員が対応した。Eさんは，「最近，お兄ちゃんが下の子をいじめてばかりいるんです。それで私，お兄ちゃんばかり怒ってしまって。でもお兄ちゃんのこと，本当は私…」と言って下を向いた。H職員は「Eさんは上のお子さんのことを，本当はどう思われているんでしょうか。」とたずねた。

1．閉ざされた質問

2．アイメッセージ

3．単純な反射

4．開かれた質問

5．明確化

【正答】4

1．適切でない。閉ざされた質問とは，「はい」「いいえ」あるいは一言で答えられるような質問である。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P263参照）

2．適切でない。アイメッセージとは，「私は」で始まる直接的主観的なメッセージを伝える方法である。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P265参照）

3．適切でない。単純な反射とは，クライエントの言葉をそのまま反射することである。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P263参照）

4．適切。開かれた質問とは，多くのことが語れるような質問である。Eさんの「本当は私…」という言葉を受け，Eさんの思いを引き出す質問となっている。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P263参照）

5．適切でない。明確化とは，クライエントの語ったことをより明確にして示すことである。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P263参照）

⑦ 事例を読んで，Aソーシャルワーカー（社会福祉士）が行うジェネラリスト・ソーシャルワークの視点に基づいた対応として，最も適切なものを1つ選びなさい。

〔事 例〕

Aソーシャルワーカーは NPO法人で女性支援を行っている。ある日，街で夜間の見回りをした際にGさん（21歳，女性）に出会った。Gさんは，妊娠していることがわかり家にいられなくなって家を飛び出してきており，夜は街で知り合った人たちの家を渡り歩いているという。Gさんは，子どもを産みたいがどうしたらいいかわからないと話した。

1．Gさんの心理的な課題に特化してアセスメントを行う。

2．Aソーシャルワーカーの所属している法人では母子の支援を行っていないことを説明して，相談に対応できないことを謝罪する。

3．一人で子育てすることの困難さについて理解できるように話す。

4．夜間，街を歩くのは危険であることを説明する。

5．Gさんの思いや家族や知人との関係性を聴きながら，今後の対応を一緒に考えていく。

【正答】5

1．適切でない。ジェネラリスト・ソーシャルワーカーは，クライエントのバイオ・サイコ・ソーシャルの側面やクライエントを取り巻く環境について包括的にアセスメントを行っていく。心理的な側面のみのアセスメントを行うだけでは，Gさんの問題解決を図ることはできない。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P148参照）

2．適切でない。ジェネラリスト・ソーシャルワークでは，分野にとらわれずにクライエントのニーズに対応していく。また自機関のみで対応が困難であれば，適切な他機関と連携しながら実践を行っていく。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P148参照）

3．適切でない。Gさんは子どもを産みたいと思っているがどうしたらよいかわからない思いや不安を抱えている。Gさんの思いを汲み取ったうえで，Gさんの強みや課題を明らかにしながら問題解決を図っていくことが必要となる。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P190参照）

4．適切でない。Gさんは妊娠していることがわかって家にいられなくなり街で過ごしている。事情を聴いて理解した上で，どのような対応ができるのかを一緒に考えていく必要がある。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P148参照）

5．適切。ジェネラリストソーシャルワークでは，包括的・総合的にアセスメントを行い，次なる展開を考えていく。その際，クライエントのストレングスに着目することも重要となる。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P148参照）

⑧ 事例を読んで，もの忘れ外来を開設しているクリニックのT医療ソーシャルワーカー（社会福祉士）によるこの時点での対応に関する次の記述のうち，最も適切なものを1つ選びなさい。

〔事 例〕

T医療ソーシャルワーカーは，家族を介護している男性の相談が増えてきたことを感じており，また彼らがとまどいや不安を感じながら周囲との付き合いがあまりないことが気になっていた。そこで男性の介護者たちの不安を軽減し介護をしながら自分らしい生活を送ってもらうことを目的に，「男性介護者の会」を設立して集団を活用した支援を実施することとした。

1．参加者に対して先入観をもたないように，事前に参加者の情報を把握しないこととする。

2．会の中で実施するプログラム活動の成功に貢献できる参加者を選ぶ。

3．参加者が話しやすい環境が確保される場所が使用できるかを確認する。

4．参加者が気兼ねせずに話すことができるように，会が開始したらT社会福祉士は参加しないこととする。

5．参加者が適切に参加できるようにサブグループを決定する。

【正答】3

1．適切でない。グループワークを開始する前に，参加者がどのような思いや感情をもって参加するのかを，ワーカーはあらかじめ理解しておく必要がある。これを波長合わせという。波長合わせなくしてグループワークを開始した場合，グループは混乱に陥りやすい。波長合わせのために，ワーカーは参加者の置かれている状況やニーズ，感情などについて十分な情報収集を行う必要がある。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P67参照）

2．適切でない。プログラム活動はグループ目標達成のために展開していく活動である。グループワークの目的はプログラム活動の成功ではない。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P64参照）

3．適切。グループワークを行うための環境として，開始前に場所を確認する必要がある。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P66参照）

4．適切でない。T医療ソーシャルワーカーは，男性介護者の不安やとまどいを軽減するために，集団を活用した支援を行うことを目的としているため，T医療ソーシャルワーカーが参加者と関係性を構築していきながら意図的に介入する必要がある。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P64参照）

5．適切でない。サブグループは，グループワークが開始してから，時間の経過とともに，グループの中でのメンバーの位置や役割が決まっていくにつれて形成されていく。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P69参照）

⑨ 事例を読んで，担当者会議でのH相談支援専門員（社会福祉士）の対応に関する次の記述のうち，最も適切なものを1つ選びなさい。

〔事 例〕

軽度の知的障害のあるKさん（29歳，男性）は，入所していた施設を退所してアパートでの生活を開始した。H相談支援専門員がKさんに生活の様子を尋ねると，最初は不安だったが，ヘルパーの支援を受けながら買い物などの外出ができることが楽しくなってきたと話した。そこでKさんの支援の方向性を確認するために，KさんやKさんの家族と関係者を集めて，担当者会議を開催することとした。

1．Kさんが家族の元に帰って生活できることを説明する。

2．これからは支援を受けずに自分の力で生活するように説得する。

3．ヘルパー利用時のKさんの様子を担当事業者に報告してもらう。

4．新設したグループホームの入所を提案する。

5．会議を円滑に進めるために，H相談支援専門員がKさんの思いをKさんに代わって説明する。

【正答】3

1．適切でない。Kさんはアパートでの生活を開始して，外出ができることが楽しくなってきたと話している。家族の元に帰るという意向は事例から見当たらない。

2．適切でない。Kさんは，支援を受けながらアパートでの生活を楽しみ始めている。支援が不要であるという根拠は見当たらない。

3．適切。今後の支援を確認するにあたって，支援開始後の経過を観察・評価するモニタリングが重要となる。モニタリングでは，サービス提供者からみたクライエントの生活状況の変化や新たなニーズなどについても把握する必要がある。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P140参照）

4．適切でない。Kさんはアパートでの生活を楽しみ始めており，グループホーム入所の希望や必要性は読み取れない。

5．適切でない。会議の中でKさん自身に状況や思いを語ってもらうことで，関係者がKさんの状況を共有することができ，Kさんのエンパワメントにもつながる。Kさんが話をすることができるように，必要に応じてH相談支援専門員がサポートすることも必要である。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P139参照）

(10) 事例を読んで，G介護支援専門員（社会福祉士）の対応に関する次の記述のうち，最も適切なものを1つ選びなさい。

〔事 例〕

Bさん（74歳，女性）は介護保険サービスを利用しながら一人暮らしをしている。Bさんのケアマネジメントを担当しているG介護支援専門員は，Bさんが利用している通所介護の担当者から，最近Bさんが通所介護を休みがちであるとの連絡を受けた。そこでG介護支援専門員は，Bさんの様子を確認するためにBさん宅を訪問した。

1．Bさんの自宅により近い他の通所介護に変更する。

2．サービス担当者会議で通所介護の利用が決定したことを，再度説明する。

3．Bさんの最近の様子を聴き取りする。

4．来週から通所介護に通うように説得する。

5．他の利用者は休まずに通所介護を利用していることを伝えてBさんを励ます。

【正答】3

1．適切でない。Bさんが通所介護を休みがちである理由や背景を確認せずに，一方的に他の通所介護に変更するのは適切でない。

2．適切でない。サービス担当者会議の時点では通所介護の利用が計画されていても，サービスがBさんにとって適切でなかったり支援の開始後に状況が変化することもある。再度，Bさんのアセスメントを行う必要がある。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P138参照）

3．適切。サービス担当者会議の時点では通所介護の利用が計画されていても，支援を開始してから明らかになることも多い。再度，Bさんのアセスメントを行う必要がある。（『新・社会福祉士養成講座⑦相談援助の理論と方法Ⅰ 第3版』中央法規出版（2015年）P138参照）

4．適切でない。Bさんが通所介護を休みがちである理由や背景を確認する必要がある。

5．適切でない。Bさん自身の通所介護を休みがちな理由や背景について知る必要がある。他の利用者との比較ではなく，目の前のBさんの個別の状況について知ろうとする姿勢が重要である。

(11) 事例を読んで，地域包括支援センターのA管理者（社会福祉士）によるM社会福祉士に対する対応のうち，適切なものを2つ選びなさい。

〔事 例〕

Fさん（81歳，男性）は妻を亡くしてから一人暮らしである。1か月前に，Fさんが以前より痩せて衣服の状態も不潔になっていることを心配した近所の人から地域包括支援センターに相談があり，M社会福祉士が訪問を継続している。M社会福祉士が訪問するとFさんは「困っていることはないので，もう来ていただかなくても結構です」と話すが，最初に訪問した頃よりも立ち上がりなどに苦労している様子が気になっていた。M社会福祉士は必要性を感じるものの支援ができないことに悩み，上司のA管理者に相談した。

1．M社会福祉士が具体的にどのようなことで悩んでいるかを傾聴する。

2．Fさんの言葉の背景について考えてみるようM社会福祉士に促す。

3．Fさんは心配な状態なのでしっかりと見守りをするように助言する。

4．Fさんの意思を尊重して，訪問を中止するように指示する。

5．現在空きのある特別養護老人ホームについてM社会福祉士に情報提供する。

【正答】1;2

1．適切。M社会福祉士はFさんへの支援に困難や葛藤を感じており，その状況を傾聴し，共感的に理解しながら，今後の対応を共に検討する必要がある。スーパービジョンの支持的機能に該当する。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P205参照）

2．適切。M社会福祉士に対して，Fさんの状況や背景についての理解も深めるように，異なった視点からの気づきや考察を促している。スーパービジョンの教育的機能に該当する。（『新・社会福祉士養成講座⑧相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版』中央法規出版（2015年）P204参照）

3．適切でない。Fさんが心配な状態であることはM社会福祉士も理解しているが，それにもかかわらず支援ができないことに関してM社会福祉士は悩んでいる。M社会福祉士の悩みや葛藤を傾聴し整理しながら，今後の対応を検討する必要がある。

4．適切でない。Fさんは訪問を希望していないが，Fさんの状態から何らかの支援が必要だと考えられる。このような状態で，Fさんの意思を尊重して訪問を中止することは適切でない。

5．適切でない。Fさんの状況を適切に把握していない状態で，特別養護老人ホームへの入所を検討することは適切でない。